# 社会科学における「ロビンソン・クルーソー問題」

## ── いわゆる「ロビンソン的人間類型」論をめぐって ──

佐藤　嘉一*

ダニエル・デフォー『ロビンソン･クルーソー』物語を題材にして①物語・時代・作者の関わりおよび②マルクスやヴェーバーなどの社会科学者による「ロビンソン･クルーソー」論の特徴にふれつつ、③「市民社会」成立期における「個人と社会」問題の諸特質について論考する。デフォーの「一人称単数」で語られる『ロビンソン・クルーソー』物語の語り口に着眼して、この物語の「私人（プライベート・パーソン）」範疇成立の社会的歴史的意義ならびに「私」の視点（エゴロギー）の成立（自然的態度の現象学）の今日的意義が論考される。

**キーワード：「ロビンソン・クルーソー問題」，ダニエル・デフォー，カール・マルクス，マックス・ヴェーバー，経済的カテゴリーの人格化，理念型，「意味」，私人，「孤島」という実験場，伝記体の小説，一人称単数の人称形式**

目　次

はじめに
Ⅰ．物語・時代・作者
　１．物語　２．時代と社会　３．作者
　ノート：ダニエル・デフォーの生涯に関する脚注ノート
Ⅱ．どのように『ロビンソン・クルーソー』物語を読むか
　１．冒険と生涯
　２．社会科学における「ロビンソン・クルーソー問題」
　2-1．カール・マルクスにおける「ロビンソン・クルーソー問題」
　2-2．マックス・ヴェーバーにおける「ロビンソン・クルーソー問題」
Ⅲ．小括と展望
　１．小括
　２．展望
　2-1．一人称単数＜わたくし＞の視点
　2-2．日記スタイルの文体の問題

＊立命館大学産業社会学部教授

## Ⅰ．物語・時代・作者

### １．物語

『ロビンソン・クルーソー』の物語は，一種の＜伝記体の小説＞である。生い立ちから話が始まり，両親の強い反対を押し切って「家出」し，ロビンソン・クルーソーは一人前の船乗り，一人前の貿易商人となる。カナリア諸島の近辺を航海中，トルコの海賊船に襲われ，ムーア人

の奴隷となるが，ロビンソン・クルーソーはボートで逃亡し，ポルトガル船に救出され，ブラジルに上陸。親切な船長の支援を受け，ブラジルで農園経営に成功する。しかしこれに満足せず，ロビンソン・クルーソーは再び「漂泊の誘惑」に駆られて，アフリカのギニア海岸に向かう。航行中大嵐に見舞われ，遭難し，無人島にただ一人漂着する。この無人島での28年間の生活が物語の大半を占めるが，その後，故郷のイギリスに生還し，再び冒険に出かかける旨が示唆されてひとまず話は一段落する[1)]。この成り行きが＜わたくし＞の実際の体験として一人称単数の形式で綴られる伝記体の小説である。

**注**

1）以上の要約は，ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』３連作，*The Life and Strange Suprising Adventures of Robinson Crusoe『不思議な冒険』（1719），The Further Adventures of Robinson Crusoe Being the Second and Last Part of his Life, and the Strange Surprising Accounts of his Travels Round three Parts of the Globe『新しい冒険』(1719）およびSerious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe 『真面目な反省』(1814)*のうち最初の『不思議な冒険』についての要約である。一般にはこの『不思議な冒険』をもって『ロビンソン・クルーソー』の物語として理解されている。「不思議な冒険」がそのあとの２つの作品に比べて世間のひとびとによって広く愛好されたためであろう。とくに「断り書き」がない限り，「ロビンソン・クルーソー」を論ずる場合，以上の理解に従う。デフォーの３連作は，全て＜わたくし＞の実際の体験として一人称単数の形式で綴られていることも付言しておきたい。

『ロビンソン・クルーソー』物語のプロットは「クルーソーが孤島に漂着するまでの物語」と「クルーソーの孤島での生活とその後」に大きく２分される。漂着するまでの物語は，①ロビンソン・クルーソーの生い立ち②親子の「ジェネレーション・ギャップ」③父親の説論④ロビンソン・クルーソーの「家出」⑤「船乗り」「貿易商人」としてのロビンソン・クルーソー⑥「貿易商人」のその後および⑦ロビンソン・クルーソー無人島に漂着の７つのプロットである。以下①から⑥について幾つかの記述を抜粋する。主語が一人称単数，動詞はすべて過去時制で記されている点に注目したい。

①「*私は*1632年（９月30日），ヨーク市に生まれた。*私*の父は，ブレーメン生まれの外国人で，貿易でひともうけしてから，商売をやめ，ヨークに住みついた。*私*の母はこの町の出身で，母の実家はロビンソンといい，土地の名望家であった。兄が２人いた。１人は陸軍中佐で戦死，もう１人の兄の所在は不明。私は３男坊であり，これといった仕事もなく，ずいぶんと早くから私は放浪癖にとりつかれていた。（Defoe, p.28）

②「父はひととおりの学問をさせてくれて，将来私を法律家にするつもりでいた。しかし私はどうしても船乗りにならなければ気がすまなかった。*私は*父の意志や言いつけと真っ向からぶつかってしまった。母やほかの友人たちの願いや説得ともぶつかった（Defoe, p.28)。

③「まじめで分別者の父は，*私*の考えをはっきりみぬいて，忠告を私に与えてくれた。どんな理由で親の家を飛びだし，生まれた故郷を棄てなければならないのか。よくみるがいい，と父はいった。「人生の不幸を背負っているのは社会の上層と下層の者に限られている。中位の者はほとんど災難らしい災難は受けることはないし，上下の者たちのように，人生の浮沈にそうめったに苦しめられることもないのだ。ところが，あの連中ときたらどうだ。一方では淫らで，贅沢で，無軌道な生活がたたり，かと思うともう一方では激しい労働や貧乏な生活，ほとんど喰うや喰わずの

生活がたたる，というわけで，こういう生活のゆきつくところは自然心身の異常ということになる。中位の生活は実際あらゆる美徳，あらゆる楽しみの源泉といえる。このちょうど頃合いの暮らしにはいわば平和と豊かさという侍女がかしずいている。また，ここには様々な祝福がある。例えば，節制や中庸や平静や健康や社交がある。」（Defoe, p.29）

④「父の家を私が出奔した背後にはたしかに悪い力が*働*いていたと思う。世界を見てやろう，立身出世をしてやろうという乱暴とも無茶とも言える執念に*私*がとりつかれたのもその１つ*だった*。そしてひとたびその執念に憑かれてからは，父のあらゆる忠告も頼みも，いや命令さえも耳に*入らなかった*。*私は*アフリカの沿岸向けの船に*乗った*。ギニア航路とよんでいる航路*だった*。（Defoe, p.38-39）

⑤ a「*私は*ギニア沿岸の航海から帰ってきていた船の船長と*知り合った*。ギニアで大儲けをしたとかで，もう一度行くところ*であった*。正直で公明な船長と仲良しになり，*私は*少しばかりの商品を積みこんでこの船長と*船出した*。船長の指図で私は金額にして40ポンドの玩具や安物の雑貨類を買い込んで*もっていった*。（Defoe,p.39）

b「ひと儲けするつもりで５ポンド９オンスの砂金を[ギニアから]もって*帰った*のだが，それがなんとロンドンで売ると300ポンド近いお金に*なったのである*。これで味をしめ，野心が*燃え上がった*。（Defoe,p.40 ）

⑥は省略。

## ２．時代と社会

物語の背景は17世紀中葉のイギリス社会である。物語の主人公であるロビンソン・クルーソーはこの時代のイギリス社会の「中の下」階層に属する１人の青年である。『ロビンソン・クルーソー』物語の時代背景と問題を知るうえで，イギリスの社会経済史家のトーニーの以下の指摘は重要である。

中世初期ヨーロッパは，20世紀の世界全体がそうであるように，１つの閉じられた社会（a closed circle）であった。しかしそれは20世紀のように人間の知識が増えたためにではなく，反対に無知の状態が続いていたために，閉じられていたのである。また20世紀が地球全体（the whole globe）を単一の経済システム（a single economic system）に包んでしまっていて，それ以上に新しく発展する余地は全く残されていないのに反して，地中海を大昔からの基盤としていた中世初期のヨーロッパにとっては，発展は正に糸口についたばかりであった。・・・外部との関係で弾力性がなかったヨーロッパは，内部との関係でもほとんど同じように，弾力性をもっていなかった。中世ヨーロッパの社会の「基礎単位」は「むら」villageであった。農地保有者からなりたち，慣習に守られた「共同体」communityであるこの「むら」はその伝統的な日常生活の「しきたり」を「変化」という名の害毒でもって脅かす無秩序な「欲望」appetitesを，いかにも全村一致の怒りを込めて，おさえつけていた。（R.H.TAWNEY,1926, *RELIGION AND THE RISE OF CAPITALISM* 1961, 11th printing p.67- 邦訳;出口勇蔵・越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆』（上）（下）岩波文庫1961 一二〇頁）

伝統的イギリス社会もまた＜土地＞という富の形式を土台にした，王侯貴族（支配階級）と農民や都市の商工業者（被支配階級）の＜身分秩序＞の固定した社会であり，「閉じられた」社会であって，その社会の基礎単位は＜むら＞，「共同体」であった。しかし17世紀中葉には＜商品＞・＜貨幣＞・＜資本＞の結合による新しい形式の富の蓄積が進み，旧来の身分秩序にひびがはいり，新興の産業的中産者層が急速に勢力を得て，新しい「市場経済社会のシステム」（資本主義）が急速に発達する（「身分から階級へ」）。ロビンソン・クルーソーの『物語』の背

景には「中世的イギリス社会」から「地球全体を単一の経済システム」（トーニー）に包摂する「巨大な国際的市場社会」へ，狭い「閉じられた世界」から無限に「開かれた世界」へとイギリスの社会経済的秩序が転換する「推移期」の社会がある[1]。

この「開かれた世界」の檜舞台へ「いの一番」に躍り出たのは，海と陸を「自由」に往来する，ときにはアウトローの「海賊」，ときには平和な「貿易商人」とよばれる，＜海に生きるひと＞の一群であった。この海外貿易商人たちこそ，トーニーのいう無秩序な「欲望」appetites解放の率先実行者たちであった。ロビンソン・クルーソーもこの「無秩序な欲望」解放の担い手の一人に数えられよう。「ロビンソン・クルーソーを読む」とは，従って，この時代のイギリス社会の状況を背景にして「ロビンソンの言動」の含意を読みとることに他ならない[2]。

ここに17世紀中葉の「現実」の一端を示す，貴重な統計資料がある。「1688年に算定されたイギリスの家族の収入・支出の分類」（表１を参照）である。

なによりもまず，この統計一覧の「海路による貿易商人」 merchant and trader by seaの項目が注目に値する。1688年のイギリス社会には「海路による貿易商人」という職業カテゴリーに当てはまる人口が統計数字として刻まれ，すでに2,000家族が存在し，年収にして4,000ポンド，一人当たり50ポンドの所得を得ていた。当時の社会の上流階級，貴族たちの年間所得が一人当たり，僧籍にない上院議員70ポンド，準男爵55ポンドなどと殆ど差がない。これに反して最下層身分の生活者は，年収一人当たり，Labouring People and outservants といわれる労働者や通いの使用人が4.10ポンド，Cottagers and paupersといわれる小屋住まいの農民，生活保護を受ける人々が2.0ポンドである。「まじめな」牧師の年間所得が一人当たり９から10ポンド，自由土地保有者が10から12ポンド，法曹人が20ポンドである。

『ロビンソン・クルーソー』のなかに，クルーソー青年が父親の「説諭」にも耳を貸さず，航海の夢を膨らませ，その反対を押し切って，航海に出かけ，300ポンドの収益金をえたという話（Ｉ－１．**注**１）の③および⑤a/bを参照）がある。この300ポンドがどれほどのものであったか，この統計資料を「物差し」にしてみると容易に理解される。現状のままでは展望の見えない「下層社会の上」の青年たち，とりわけ成功を夢見る青年たちにとって，リスクは多いが法外な富を結果する「海上による貿易商人」にあこがれるのは当然だった。海にかこまれた国のひとびとが，＜平地に生きるひと＞という生き方と並んで，もう一つの生き方があることに気づく。＜海に生きるひと＞の生活様式が現に可能となる時代が到来したのである。

**注**

１）閉じられた世界から開かれた世界へ。社会学者は，この社会の大きな変動とともに「社会」を構成する人間類型（「社会的性格」）の顕著な変化を見出す。「内部指向型」（リースマン）人間の生成である。

「西欧中世の伝統指向的社会における共同体的な絆から解放されたときに，実は最近の数世紀における最大の社会的・性格学的変化が起こった。この変化に比べれば，その後の諸変化は大して重要ではない。・・・西欧の歴史の中でルネッサンスと宗教改革とともに出現し，しかも，いまや消え去ろうとしている社会は，内部指向を同調性の主要原則とする

**表１　1688年に算定されたイギリスの家族の収入・支出の分析**

| 家族数 | 身分・位階・称号・資格 | 一家族当たりの頭数 | 人数 | 家族当たり年間収入 | 一人当たり年間収入 | 一人当たり年間支出 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 160 | 僧籍にない上院議員Lords | 40 | 6,400 | £2,800.0 | £70.0 | £60.0 |
| 26 | 聖職者上院議員Lords | 20 | 520 | 1,300.0 | 65.0 | 55.0 |
| 800 | 準男爵Baronets | 16 | 12,800 | 880.0 | 55.0 | 51.0 |
| 600 | ナイト爵Knigts | 13 | 7,800 | 650.0 | 50.0 | 46.0 |
| 3,000 | 大地主Esquires | 10 | 30,000 | 450.0 | 45.0 | 42.0 |
| 12,000 | 農園主Gentleman | 8 | 96,000 | 280.0 | 35.0 | 32.10 |
| 5,000 | 官吏Person in offices | 8 | 40,000 | 240.0 | 30.0 | 27.0 |
| 5,000 | 官吏 | 6 | 30,000 | 120.0 | 20.0 | 18.0 |
| 2,000 | Merchants and traders by sea | 8 | 16,000 | 400.0 | 50.0 | 40.0 |
| 8,000 | Merchants and traders by land | 6 | 48,000 | 200.0 | 33.0 | 28.0 |
| 10,000 | 法曹人Person in the law | 7 | 70,000 | 140.0 | 20.0 | 17.0 |
| 2,000 | 牧師Clergymen | 6 | 12,000 | 60.0 | 10.0 | 9.0 |
| 8,000 | 牧師 | 5 | 40,000 | 45.0 | 9.0 | 8.0 |
| 40,000 | 自由土地保有者Farmers | 7 | 280,000 | 84.0 | 12.0 | 11.0 |
| 140,000 | 自由土地保有者 | 5 | 700,000 | 50.0 | 10.0 | 9.0 |
| 150,000 | 農民 | 5 | 750,000 | 44.0 | 8.15 | 8.10 |
| 16,000 | 諸科学・人文学者 | 5 | 80,000 | 60.0 | 12.0 | 11.10 |
| 40,000 | 店主・小売商人 | 4.5 | 180,000 | 45.0 | 10.0 | 9.10 |
| 60,000 | 職人・手工業者 | 4 | 240,000 | 40.0 | 10.0 | 9.10 |
| 5,000 | 海軍士官Naval officers | 4 | 20,000 | 80.0 | 20.0 | 18.0 |
| 4,000 | 陸軍士官Military officers | 4 | 16,000 | 60.0 | 15.0 | 14.0 |
| 511,586 | | 5.25 | 2,675,520 | 67.0 | … | … |
| 50,000 | 平水夫Common seamen | 3 | 150,000 | 20.0 | 7.0 | 7.10 |
| 364,000 | 労働する人・通いの使用 | 3.5 | 1,275,000 | 15.0 | 4.10 | 4.12 |
| 400,000 | 小屋住農・被救済民 | 3.25 | 1,300,000 | 6.10 | 2.0 | 2.5 |
| 35,000 | 平の兵士 | 2 | 70,000 | 14.0 | 7.0 | 7.10 |
| 849,000 | | 3.25 | 279,500 | 10.10 | | |
| | 浮浪者 | | 30,000 | | 2.0 | 3.0 |
| 849,000 | | 3.25 | 2,825,000 | 10.10 | … | … |

出典は、C.B.Macpherson,1962 *The Political Theory of Possessive Individual* p.289f.（マックファーソン著藤野渉・他訳『所有的個人主義の政治理論』「付録」）による。原資料はグレゴリー・キングという人物の書いた「イギリスの国情に関する自然的政治的観察および結論」（Gregory King, Natural and Political Observation and Conclusions upon the State and Condition of England）に見出される。

社会の具体例である。そのような社会の特徴としては，その成員の流動性の増大，資本の急速な蓄積，並びにたえざる拡大といった現象があげられよう。この拡大という概念には，内に向けては財と人間の生産の拡大，外に向けては探検，植民，帝国主義といったような形での「拡大」が含まれる。こうした社会では選択の余地がぐんと広がっているし，またこの新しい問題状況は，よりしっかりしたイニシアティブを要求するから，そこには新しいタイプの性格をもった人間たちが登場することになる。それは，厳密かつ自明の伝統指向に頼らずに，社会的に生きていくことのできる性格ということになる。」（D. Riesman,1989, p.13　加藤訳一一頁）

２）「無秩序な欲望」には二つのタイプの態度が区別される。１つは＜共同体的秩序＞，＜むら＞びとの神聖な伝統的秩序感覚の限界を

破り，さらに過度に「欲望を肥大させる」欲望解放主義のタイプ。15世紀末葉から17世紀中葉に現れた伝統的農民の＜共同用益地＞を＜私的土地＞として囲えこむ領主たちのエンクロージャー運動，あるいは古くから存在した＜冒険資本主義＞。大金融業者，独占資本家，宮廷の御用商人，御用金貸，植民地企業家，会社発起人など。＜伝統的生活様式＞を身につけながら新しい時代の動向にも適応する商人たち。もう１つのタイプはは，伝統的秩序を＜生ぬるい＞として，欲望を切りつめ，職業としての営利活動に精励恪勤する「禁欲主義」のタイプ。ピューリタンの諸教派の信仰に生きる中産的小資本家層。ヴェーバーの周知の『プロテスタティズムの倫理と資本主義の精神』のテーマである。ヴェーバーはベンジャミン・フランクリンの『貧しいリチャードの暦』を「プロテスタンティズムの倫理」の典型的な自己革新の例としている。しかし，今日イギリス人は，ベンジャミン・フランクリンに先駆けた17､18世紀のイギリスの市民文学，ミルンの『失楽園』，ジョン・バニヤンの『天路歴程』そしてダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』を忘れないであろう。「ロビンソン・クルーソー」は，リースマンも指摘するように，「内部指向的な若者たち」に，精神的でかつ冒険的な野心と活力をかき立てる」（Riesman, p.92　加藤訳八二頁）ことに大いに貢献した。なおⅡ-２-２注２）の記述をも参照されたい。

## ３．作者

これらのテーマについて触れる前に，『ロビンソン・クルーソー』の著者ダニエル・デフォーの人と思想について一言しなければならない。デフォーの略伝を調べてみると（３．**注**の「ダニエル・デフォーの生涯に関する脚注ノート」を参照），物語の主人公ロビンソン・クルーソーと同じように，新しい時代の到来の中で自分流に生きた１人の＜爵位のない＞私人（private person）としての「市民」の姿が見えてくる。

デフォーの生きた時代のイギリスは新旧の２つの力（伝統的地主層――王侯・貴族――の利害を代表するトーリ党と新興の産業市民層の利害を代表するホィッグ党）が拮抗するなかで「大英連合王国The United Kingdom of Great Britain」の誕生をみ，さらに工業生産技術や生産力の飛躍的発展によって「産業革命」を準備する，急速な領土の＜膨脹と拡大＞の途を歩み始める。「モダン」とよばれる新しい社会の性格がいよいよはっきりしてくる時代の移り行きのなかで，デフォーは激しく生き，その栄光と挫折を経験する。ロビンソン・クルーソーの＜生涯＞よりも実際のデフォーの＜生涯＞のほうが，はるかに孤独で実存的であったのではないか[2]。デフォーは『ロビンソン・クルーソー』を，フローベルが「ボバリー夫人はわたしだ」といったのと同じような心境で書いたのだろう。

### 注

１）**ダニエル・デフォーの生涯に関する脚注ノート**

ダニエル・デフォーは1660年ロンドン旧市街セント・ジル・クリップルゲート教区で生まれた。父親はジェムズ・フォーといい，非国教派の１つ，長老派教会に属する獣脂ロウソク製造販売人であった。父親はデフォーを長老派教会の牧師にしようと望み，その目的でニューイングトン・グリーンにあるチャールズ・モルトン師の創設した非国教派の学院（アカデミー）で息子を学ばせた。この学院の大きな特徴は「審査律」The Test Act［1673-1828］によりオックスフォードやケンブリッジでの教育と研究が禁じられた学者たちが運営した点であった。学院の教育方針は貴族的教養よりも市民的実学を重視し，ギリシャ語やラテン語の古典教育よりも自然科学や数学を徹底して教

育し，また英語の正しい書き方等を厳しく指導した。この学院での生活がデフォーの文筆活動の下準備として役立ったが，父の意思に反し，彼は結局聖職者の道を選ばなかった。

1680年モルトン学院を終えると，デフォーはストッキングや紳士用装身具などの卸売りの商売を仲間のスタンクリフ兄弟とはじめた。ヨーロッパへの商用旅行を試み，さまざまなことばや地理の知識を得，のちにデフォーの文筆に役立った。裕福な商人の娘と1684年に結婚し，８人の子どもを儲けた。

1685年，新国王ジェームズ２世即位。カトリック教徒のジェームズ２世の即位に反対するモンマウス公爵（デューク）の反乱にデフォーも参戦するが，反乱軍は鎮圧され，多くが捕虜となり処刑された。デフォーは，オランダに逃れ，処刑は免れた。

その後1680年代から90年代はじめまで，デフォーは「商売」と「政治」の二足草鞋（わらじ）を履く。デフォーの商売取引は，最初からスケールが大きく，危ない賭をし，資金能力の限度を遙かに超えたものである。土地の投機やじゃこうネコの飼育－この糞便が貴重な香料の材料となる－等である。英仏戦争でデフォーの海運途上の積み荷が損失を蒙り，それが原因で1692年債権者に総額１万7000ポンドの借りを残して破産。

ジェームズ２世を退位に追いやった市民戦争（1688～1689），いわゆる名誉革命は，商売上のもめ事からデフォーの気分を一転させる。新国王ウイリアム３世のオランダからの勝利の来着模様をデフォーはウインザーで見物。新王の民兵隊の一員となり，オレンジ公ウイリアムとメアリイ女王をエスコートする。新国王の熱狂的な支持者の多くは，デフォーのような「非国教徒の商人たち」であった。

破産後のデフォーは，グラス製品やビン類に関する政務の会計（1695-1699）をしたり，政府の宝くじの管財人の１人になったり，政治のつながりで得た臨時の仕事により糊口を凌ぐ（1695,1696）。これらの政治的地位をとおしてデフォーはホィッグ党政府のリーダーやウイリアム３世自身に近づくチャンスを得る。

ロンドン東部，テイムズ河のチルバリイ近くの沼地に煉瓦とタイル工場を設立（1694）し，これが大いに繁盛する。工場には一時100人もの人間が働き，「年間600ポンド」の収益を得，新築の家に住み，４輪馬車に乗り，デフォーの生活は順調であった。

1690年代後半以後デフォーの執筆活動が世間から注目される。『生粋の英国人』*Trueborn Englishman*（1701）は，デフォーを同時代の最も人気のある詩人に押し上げた作品である。『外国人』*The Foreigner*というオランダ人にたいする反感の風刺文を「へたくそな文体の下品で嫌らしいパンフ」とこき下ろし，オランダからやってきた国王ウイリアム３世を擁護した詩文である。これは発売と同時に売りきれ（８万部），大評判となる。国王の政策が「オランダ寄り」とする英国人の大方の世論に対して，デフォーは王を終始擁護する文章を書いたのである。翌年1702年，ウイリアム３世が世を去ると時代の様相は一変する。ウイリアム３世による「非国教徒優遇」政策にたいする憤懣がトーリ党を中心に渦巻き，その過激派は'Occasional Commitment'（「非国教徒は英国教会の聖餐礼に年一度例外として礼拝参列できる」という条項）を廃止せよなどと，ことごとに政策の転換を主張した。この高教会派の過激派を，デフォーは「泥棒どもを磔にせよ！敵どもをうち破って国の土台を築こう。慈悲の扉は惑わされた人々の帰国にはいつも開かれていた。強情ものは鉄の棒で閉め出せ」と*The Shortest Way with the Dissenters*（1702）で嘲笑したが，これが国務大臣ノッチンガム伯爵の怒りを招き，デフォーは不敬罪で「賞金50ポンドのお尋ね者」（1703.1.2）となり，捕らえられ（1703.5）処罰された。「３度のさらし台，罰金200マルク（135ポンド）無期懲役」，判決はきびしかった。

その後下院議長Robert Harleyの尽力によ

り，Sidney Godolphin財務卿からデフォーに恩赦が与えられる。自由の身とはなったが，この刑には大きな爪痕が残る。６ヶ月間ニューゲート刑務所に収監されていた間に，彼の煉瓦・タイル工場がつぶれ，デフォーは再度の破産者となり，以後生涯債務者にデフォーは悩まされる。

デフォーは友人のWilliam Peterson（イングランド銀行の設立者の一人）に救いの手を求め，ハーレイに工作してもらう。ホィッグ党のデフォーがトーリ党の政治家の傘下に入ることを意味する。デフォーはその時の自分の気持ちをペターソンに告白している。「何ともいいようがない恥ずかしい事柄により，わたしは非国教徒全部の人たちの体面を傷つけてしまったが，みんなに対してお詫びのしようがないと思う以上に，自分が口惜しい」と。ハーレイの尽力で自由を得たデフォーは，その見返りに自分の義務を果たした。ハーレイが首相になるために，デフォーは広報活動（パブリック・リレーション）を開始したり，政府が正確に世論の声を聞き取る一種のモニター制度（情報ネットワーク）を設けることを進言している。特記すべき事項は，デフォーのスコットランド旅行（1706年９月）である。「連合王国」樹立の気運をスコットランドに高めるべくデフォーは健筆を揮う。ウイリアム３世治下の優れた批評家として知られるデフォーは，今度はアン女王治世下における*Review*誌（1705-12まで週３回発行）の流麗能弁な匿名の書き手として知られることになる。デフォーは，依然ホィッグ党員であったが，彼の党派関係は明白である。*Review* はホィッグ党のジャーナリストから攻撃され，デフォーは裏切り者の烙印を押される。

この時代の最大の政治的係争問題は「王位継承の問題」である。アン女王には子どもがなく，ジェームズ２世の排斥を結果した王位継承法（1701）により，王位は王位請求者，女王の兄弟であり，フランスに逃亡したカトリックのスチュアート家の家督ジェームズ２世にはなく，ドイツの，プロテスタントのハノーヴァー家に譲り渡されることになっている。ホィッグ党の論敵たちが告発したように，デフォーの雇い人のトーリ党は事実上密かにスチュアート家と交渉をもっていた。狡猾なハーレイが一方で同じようにハノーヴァー家ともオープンに交渉を保ちながら。どの程度これらの交渉についてデフォーが知っていたのかは定かではないが，かれは確かにホィッグ党の非難に対して現内閣を擁護した。「新閣僚の何人かが王位請求者に賛成だと主張するなら，実にばかげている。もしその人物にたいする敬意の務めを大事にするなら，そいつはきっと発狂し，失神した，狂人であるに違いない，中国やインドの王と同様，この国の行政権をとる人物には適しない。」デフォーは矢継ぎ早に３本のハノーヴァー家の王位継承反対の文書を書く。　1713年，皮肉にもこれがまたデフォーにとって悲惨な結果となる。ホィッグ党のジャーナリストが最高主席判事トーマス・パーカー卿に公式に告訴し，デフォーは逮捕され，1713年４月11日，ニューゲート刑務所に送られる。ハーレイは直ちに保釈金で釈放の準備をしたが，デフォーが*Review*でパーカー判事を批判したので，再び名誉毀損で投獄の身となる。11月20日，内閣が得た女王の恩赦で出獄。この事件で1713年*Review*は廃刊，かわって雑誌*Mercator*が発刊される。デフォーは新しい雑誌に政府の政策を擁護する匿名論文を執筆する。

1714年ハーレイは公職を去り，アン女王は亡くなる。トーリ党は凋落し，デフォーの経済的逼迫は増大する。デフォーは病いで床につく。

1719年４月『ロビンソン・クルーソーの生涯と世にも不思議な驚くべき冒険』，数ヶ月後の続編『新しい冒険』の出版とともに，デフォーの生涯の最終局面が始まる。この時期の著作とされる作品名を以下に掲げる。

*Memories of a Cavalier, Captain Singleton*（1720），*Moll Flander, A Journal of the Plague Year, Colonel Jack*（1722）, *A New Voyage Round the World, A*

*General History of the Pyrates, Roxana*（1794），*A Tour thro' the Whole Island of Great Britain*（３巻本1724,1725,1725）等の一連の長編小説。その他にも*Religious Courtship*（1727），*The Complete English Tradesman*（２巻本，1725-27），*The Political History of the Devil*（1726），*Conjugal Lewdness; or Matrimonial Whoredom. A Treaties concerning the Use and Abuse of the Marriage Bed, An Essay on the History and Reality of Apparitions*（1727），*A Plan of the English Commerce*（1728），*The Complete English Gentleman*（1729）など，大小あわせると566篇の単著。実際のところデフォーがどれだけ著述したのかはわかっていない。政治記者のデフォーは実名を秘匿し，無署名の作品がほとんどであるためである。

1704年例の破産以来，デフォーの生活は収入があるように見えて，実に不安定そのものであった。家族を扶養し，ロンドン北部，ストック・ニューイングトンにある私宅を維持するために金策に走りまわった。「私はこの世の中に善を求めるにはこの世をあまりにも知りすぎてしまった。悪に走るのも全く価値のないことがわかった。とても不思議な人生を経験した。私は実に変化に富む摂理のテーマそのものである。大からすが食料の調達者であったという預言者エリヤ以上に私は奇跡によって養われた。いつぞや私は自分の一生の場面を詩文にこう要約したものだ。だれぞかく転変せる運命を味あわいしものありや，われ，13度貧者となり富者となりぬ」と。

デフォーはかつての負債の追求から逃れようとして身を隠した。1731年に亡くなったとき，彼はロンドンの宿屋でたった一人ぽちだった。デフォーが自分の死を見つめる１通の手紙が残されている。「自分は疲れたものたちが安らぐところ，不正なものたちが厄介ごとをやめるところへ急ぐ：たとえその航海が波立ち，その日が嵐であろうとも，このような仕方で主がその終わりへと私を導くことを嘉し給うのであれば。どの道，魂のこのような気分においてわたくしは死することを願う：Te Deum Laudamus 」と。（以上のデフォーの生涯に関するノートはJohn J. Richetti *Daniel Defoe,* p.1-14, 1987. G.K. Hall & Co. Bostonを参照した。）

2）「孤独」をデフォーは『ロビンソン・クルーソーの真面目な反省』においてその考察の第１のテーマに掲げている。「わたしの生涯はまさにそう呼べるような不思議な場面に直面しておりながら，私のあとからやってくるひとびとにたいして，もし私が言うべきなにごともなく，また面白くてためになるようないかなる観察もしいないとすれば，私の孤独な漂泊の年月がなんの役にも立たなかったことになる。」（*Serious Reflexctions.* p.1）孤独solitudeそして漂流（漂泊）floatingは，ロビンソン・クルーソーの『アイデンティティ』形成問題の中核にあるテーマである。

## Ⅱ　どのように『ロビンソン・クルーソー』物語を読むか

### １．冒険と生涯（活）

『ロビンソン・クルーソーの冒険と生涯(活)』物語は「若いクルーソー」から熟年の「ミスター・ロビンソン」にいたる，文字通りの＜生涯＞と＜冒険＞の物語である。おもしろいことにその「冒険と生涯」の一対の結びつきがしばしば切り離されて，＜生涯（ライフ・スタイル）＞中心か＜冒険＞中心か，『ロビンソン・クルーソー』はいずれか一方の話として読まれている。漫画や絵本の中に登場する児童用の『ロビンソン・クルーソー』は，クルーソーのはらはらどきどきの＜冒険＞，サバイバル・ゲームに勝利する「強くて勇気のある逞しい男」の側面が強調される。これに反して，いわゆる「社会科学」の理論に登場する『ロビンソン・

クルーソー』は，クルーソーの冒険抜きの「ロビンソナーデRobinsonade」，つまり真面目な「ロビンソン氏の＜生活＞と意見」 ── 場合によっては宗教的教訓話（清教徒的（ピューリタン）人生訓）を含めて ── の側面が強調される。

これは一概に悪いとか，間違いであるとかの問題ではない。読み手の一種の「思考の経済」ともいうべき問題であり，読み手の＜関心＞によって，強烈な印象を受けた部分や好都合な部分が「我田引水的に」選り分けられて読まれる。無意識のうちに誰もがやっている読み方であり，またそのような読みかたが可能であるから，同じ１冊の本を読みなおすと新しい感想も沸いてくる。

## ２．社会科学における「ロビンソン・クルーソー問題」

19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて，まずヨーロッパの社会科学者たち，マルクス（1818-1883）やマックス・ウェーバー（1864-1920）等によって，つぎに20世紀の中葉にはアメリカの社会学者たち，パーソンズ（1902-1979）やリースマン（1909-1985）等によって，それぞれの読み方にしたがって「ロビンソン・クルーソー」は論じられ，引用もされている。物語が誕生してかれこれ300年になる今日でも，事情は同様である[1)]。ロビンソン・クルーソーほど人気のある小説のキャラクターは滅多にないのではないか。なぜだろう。

大塚久雄『社会科学における人間の問題』（1977）は「ロビンソン・クルーソー」問題を社会科学の立場から解説した著作として興味深い。

> 私のような社会経済史を専攻した人間が，やつむじ曲がり的に読みますとロビンソンの「孤島における生活」には，なにか社会的モデルというものがあったと，どうしても考えざるを得なくなるのです。そして，その社会的モデルは，著者デフォーが生きた時代，17世紀の終わりから18世紀前半にかけての，広くイギリスの農村に住み，そしてさまざまな工業生産，特に毛織物製造を営んでいる中小の生産者たち，＜産業的中産者層＞の生活様式であった（大塚1978，二十四頁　傍点は筆者）。

『ロビンソン・クルーソーの冒険と生涯』の物語には「航海に出るまでの話」や「一人前の船乗，一人前の冒険商人になる話」等がロビンソンの「孤島における生活の話」に先だって描かれている（Ⅰ-１の注１）参照）。しかし「私のような社会経済史を専攻した人間」には，物語はそれ自体として興味・関心の対象とはならず，むしろ「17,18世紀のイギリスの社会生活」に適合する個所が力点を付して読まれる。大塚のいう「ややつむじ曲がり的な読み方」である。「物語」の全体から「孤島におけるロビンソンの生活」が「ロビンソン的人間類型」として描き出され，17世紀の終わりから18世紀中葉のイギリス社会の「中産的生産者層の生活様式」の理念型ないし「モデル」であると解説される。冒険商人のロビンソン・クルーソー ── 「投機的な，あるいは伝統主義的な，非合理性の残滓を身に帯びたひとびと」（同書，六十頁） ── の波瀾万丈の＜冒険＞物語は，脇へ退けられ，いわゆる「社会的モデル」問題からフェード・アウトする。勿論『ロビンソン・クルーソー』物語が純粋な形における「ロビンソン的人間類型」の物語ではないことを承知の上で。

この「ロビンソン的人間類型」論，もっと幅広くいえば「合理的経済人モデル」論は，大塚

史学だけに特有の読み方であるというより，むしろ社会科学，とりわけ経済学における共通の『ロビンソン･クルーソー』の読み方であるといってよい。

**注**

1）例えば次のような文献がある。Manuel Schonhorn, *Robinson Crusoe*, Defoe's Mythic Memory, and the Tripartite Ideology（1997）. Leopol Damlosch, Myth and Fiction in *Robinson Crusoe*（1985） これらの文献については*Roger D. Lund （ed.）, Critical Essays on Daniel Defoe（1997）*を参照されたい。またH.Daniel Peck, *Robinson Crusoe:* The Moral Geography of Limitation. Mary E. Butler（1973）, The Effect of the Narrator's Rethorical Uncertainty on the Fiction of Robinson Crusoe（1983）.以上の論文は Harold Bloom（ed.）, *Daniel Defoe（1987）* に収められている。

## 2-1．マルクスにおける「ロビンソン・クルーソー問題」

このような読み方はマルクスについても妥当する。『資本論』の序文がただちに思い浮かぶ。

> 「おこりうべき誤解を避けるために一言。資本家や地主の姿を私は決してバラ色の光で描かない。むしろ，ここで諸個人が問題になるのは，もっぱらかれらが経済的カテゴリーの化身である，（すなわち）一定の階級的生活状態や階級利害の担い手であるかぎりにおいてである。経済的社会構成体の発展を一つの自然史的過程として理解する私の立場は，他のどの立場よりも，個々の人間に生活状態Verhältnisseの責任を負わせない。どんなに個々の人間が主観（体）的に生活状態を超越しようと努めても，個人は社会的にみれば生活状態の所産にとどまるのだから。」（Marx, *Das Kapital* 1., S. 16）

経済学（より正確には，経済学批判）の目的は，マルクスにとって，経済的社会構成体（とくに「資本」という富の形式を土台にして回転する自己再帰的経済社会システム）の成り立ちを理論的に根拠づけること（「経済的社会構成体の発展を一つの自然史的過程として概念すること」）である。この目的にとって重要な問題は，階級的生活状態の中で＜主観的に＞思ったり，悩んだり，苦しんだりする「生身の人間」（行為者）の問題ではない，むしろ「階級的生活状態や階級的利害の担い手」，「経済的諸カテゴリーの化身」Personifikation der ökonomischen Kategorienとしての人間である。社会状態の所産としての人間，社会の関数としての人間，「社会」の状態，「構造」の問題に探求の力点がおかれる。

『ロビンソン・クルーソー物語』の読み方も以上と全く同様である。

> 経済学はロビンソン物語を好むから，まず，ロビンソンを彼の島に登場させよう。もともとかれは慎ましやかな性格の持ち主であるが，それでも彼は異なる種類の欲望Bedürfnissを満たさなければならない。従って道具をつくり，家具をこしらえ，魚貝をとり，狩猟をするというような相異なる種類の有用労働 nützliche Arbeitを行わねばならない。祈りBetenその他についてはここでは語らない。というのはわれわれのロビンソンはこの行いに楽しみを見出し，このような活動を休息と考えているからである。Marx, ebd. S.91（傍点は筆者）

これをデフォーの小説におけるロビンソンの「孤島における第３年目の生活」の文章と比較してみよう。

> こうして，このような心境のうちにわたしの第３年目がはじまった。･･･私はその日その日

のいろんな仕事に応じて規則正しい日課daily employmentsをつくって懸命に働いた。例えば，その第１は，神に対する礼拝my duty to Godと聖書を読むことthe reading the scripturesであった。これは一定の時間をきめて１日に３回，１年を通じて変わらなかった。第２は，食糧を探しに鉄砲をもってでかけることであった。これは雨が降らない限り毎朝３時間はかかった。第３は，食糧用として殺したり捕まえたりしたものを処理したり，貯蔵したり，料理したすることである。（Defoe, p. 126）

以上の文章を対比すれば，その違いは歴然としている。ここでマルクスは，研究の関心をもっぱら「有用労働」にしぼり，「祈り」Betenその他を関心の外側に捨象する。生身の人間のロビンソン・クルーソーにとって「祈り」や「なぐさめごと」や「娯楽」は＜切実な＞生活実践の問題であろうが，「有用労働」という「経済的カテゴリー」の化身「ロビンソン」には無関係（イレリヴァント）である。マルクスのロビンソン・クルーソーの読み方は，文脈はずれの自由解釈である。

しかしこの自由解釈から導出される「孤島でのロビンソンの有用労働」には著者のデフォーすら予想しない「人類史的意義」が付与される。マルクスはロビンソンの孤島を「明るい島」とよぶ。「われわれはロビンソンの明るい島 lichte Inselから陰鬱なヨーロッパの中世に移ろう」（Marx, ebd. S..91）と。ロビンソン・クルーソーは「絶望の島」desperate islandと呼ぶのに，なぜマルクスは「明るい島」と呼ぶのだろうか。

『陰鬱な』ヨーロッパの中世には「自立した人間」にかわって「誰も彼も依存しあっているのをみる。農奴と領主，家来と諸侯，平信徒と僧侶。この人身の依存状態persönliche Abhängigkeitsverhältnisseが，物の生産の社会的状態およびその状態の上に築かれる生活の縄張りを特徴づけている。」（Marx, ebd. S.91）

この「人身の依存状態」には，「自立した人間」の有用労働，すなわち「私的労働」Privatarbeitによる社会的分業の状態が対比される。この社会的分業の状態においては，つねに「自立して互いに営まれる私的労働，だが社会的分業の自然に生長する分節として，全面的に相互に依存しあっている私的労働，これらの私的労働がたえず社会的にみて釣り合いのとれた度合にひきもどされる」（Marx,S.89）。私的労働を「たえず社会的にみて釣り合いのとれた度合にひきもどす」のは「商品市場」である。「万人は万人にとって商人である」とホッブスの＜口まね＞をしたのはテンニエスであるが，「私的労働」の社会的性格を言い当てた見事な「範式（パラダイム）」である。

ロビンソンの「有用労働」の場合はどうか。それは「海に囲まれた孤島におけるたった１人の有用労働」である。たった１人の有用労働であることは「商品市場」の法廷から永遠に免責されることを意味する。ロビンソンは，もっぱら自分の＜欲望＞に従って異なる種類の有用労働に従事し，それを「労働時間の明細書」に自ら記帳し，自己管理し，自らの労働の全過程を自らのもとにおくことができる，またその生産物も自由に処分できる。「私の私による私のための有用労働」。ロビンソンは全くの「私人」Privatmenschである。孤島での自らの有用労働とそれが作り出す富がすべて常に自分自身へと＜戻ってくる＞が故に，ロビンソンにとってこの島は「明るい」のである[注]。

**注**　人類の有用労働の長い歴史には，一方に人身の依存的労働の歴史，もう一方には私人的労働の歴史（二重の意味で自由な私的人格の「近代的賃金労働者」の有用労働の歴史）がある。人類の有用労働の歴史（＝「自然史的過程」）のなかで，ロビンソンの有用労働のもつ純粋な私人的性格は「一つの時代の終わり」（「資本制に先行する生産様式の諸形態」の歴史）と「新しい時代の始まり」「資本制生産様式」の歴史」の＜あいだ＞，ほんとうに短い幕間の「一瞬のドラマ」だ，とマルクスはいいたいのである。いってみれば，V字形に伸び広がるこの２つの有用労働の歴史の底の尖った角のところ，これまでの「人身の依存的労働」の＜暗い＞歴史の右下がりの歴史と新しくこれから始まる多くの可能性をはらんだ「近代的賃金労働」の右上がりの歴史との間の丁度中間にある転換点の位置に「孤島でのロビンソンの有用労働」は見出される。＜前近代＞と＜近代＞の大きな社会変動の「幕間」に生起した「つかの間の平和な小市民階級の労働と生産」の明るい島の物語。マルクスの読み解く「ロビンソン・クルーソー」の人類史的意義である。

## 2-2．マックス・ヴェーバーにおける「ロビンソン・クルーソー問題」

ところで，デフォーの描くロビンソン・クルーソーの「孤島における生活」は，ⅰ.暦をつけ，ⅱ.日記を書き，ⅲ.自分を見つめ，ⅳ.改悛（回心）し，ⅴ.「祈りと労働」のうちに暮らす生活であるが，またⅵ.偶然生け贄として島に連れてこられた１人の未開人を救出し，「フライデイ」と名づけ，言葉を教え，宣教する生活でもある。

ここにマルクスによる「ロビンソン・クルーソー問題」と背中あわせのもう一つの「ロビンソン・クルーソー問題」が成立する。ロビンソン・クルーソーが暦をつけ，日記を書き，自分を見つめ，改悛し，祈ること，これらはみな「祈り（Beten）その他についてはここでは語らない」としてマルクスが経済学の主題から「捨象した」事柄である。ロビンソンにおける「非経済の問題」とこれを呼ぶことにしよう。この非経済の問題をさらにふくらますなら，孤島におけるロビンソン・クルーソーの生活の「経済と非経済の相互関連」が問われてよいし，またこの問いを真正面に据えることが，マルクスの「文脈はずしの自由解釈」によるロビンソン・クルーソーを「孤島におけるロビンソン・クルーソーの生活」に引き戻して捉え直すことにもなろう。

「同時に伝道もする孤立した経済人」としてのロビンソン・クルーソー（マックス・ヴェーバー），この読み方は社会科学における『ロビンソン・クルーソー』物語のもう１つの読み方である。

マックス・ヴェーバーは，マルクスと同様に，否，もっと熱心にロビンソン・クルーソーについて語る。ヴェーバーのロビンソン・クルーソーは「経済のカテゴリーの人格化」ではなく，「考えたり，工夫したり，意欲する」経済家のロビンソン・クルーソーであり，同時に「祈り，伝道もする」敬神家のロビンソン・クルーソーでもある。まず，ヴェーバーにおける「経済家のロビンソン・クルーソー」を登場させよう。マルクスが語るような語り口でヴェーバーもロビンソンを語る。

> 「デフォーのロビンソンは ── シュタムラーは理論的国民経済学がそうするのと全く同じようにときおりロビンソンの例を用いるので，われわれもまたそれ故そうせざるをえないのだが ──，その孤立した環境におけるかれの生存状態にしたがって合理的な経済（原文ゲシュペ

ルト）を営んでいる。ということは，疑いもなくロビンソンはその財の消費並びに財の獲得を一定の「規則」に，しかもなお特別に「経済的」規則に従わせる。」（M.Weber, *G.A.z.WL*., S.323　松井訳　三五頁）

ロビンソンが，島の森林の立木の数からみて『経済的に』保護を必要とするので，やってくる冬のために伐採しようと思う，一定の樹木に斧で「印をつける」場合，あるいは貯えの穀物を『倹約する』ためにこれをいくつかに分けて一部を『種まき用』として別に取り分けておく場合，…　このような場合『外的に』知覚しうる äußerlich wahrnehmbar（樹木に「印を付ける」・「穀物をいくつかにわける」といった＝筆者）出来事が『出来事の全部 der ganze Vorgang』ではない。これらの措置にはじめてそのような性格を刻みつけ，また『意義』を与えるものは，その措置の『意味』（立木の経済的保護・穀物の経済的倹約＝筆者）である。（M.Weber, *G.A.z.WL*., S.332 松井訳 四二頁。傍点は筆者。）

経済家としてのロビンソン・クルーソー。孤島においてロビンソン・クルーソーは樹木に斧で「印をつける」行動をしている。なぜそのような行動をしているのだろう。「森の立木をむやみに乱伐すれば遅かれ早かれ島から森の姿が消えてしまう」とロビンソンは「考え（マイネン）」，またこの冬の薪用にと，伐採する樹木に「印をつけている」。「印をつける」という行動は，それだけで自足しているのではなく，立木の「＜経済的＞保護の必要」や「薪の必要」（というロビンソン・クルーソーによって「主観的に思われた意味」）と意味的に関連しあっている。「穀物をいくつかに分ける」という観察（知覚）されるロビンソン・クルーソーの行動の場合も，それだけで全部だというのではなく，その行動は「穀物の経済的倹約のため」というロビンソン・クルーソーの「考え」（＝主観的に思われた意味）と意味的に関連しあっている。要するに，行動ではなく，またマルクスのいう「構造」でもなく，ここでヴェーバーがフォーカスィングしている問題は，ロビンソンの「行為」についである。

ロビンソンのある行動の客観的な結果や経過は，その動機，理由や目的，あるいは理念など，ロビンソンの「主観的に思われた意味」（ヴェーバー）と関連づけられてはじめて「ああ，なるほどそうか」と得心がいく。ロビンソン・クルーソーの行動の，いわば明るい「穹窿」の部分ともいうべき，可視的な観察可能な出来事と，その行動がしつらえる暗い「くぼみ」，ロビンソン・クルーソーによるその行動への不可視の「意味付与」とがいわば「対（ペア）」化されるとき，その出来事は「理解」できるのだ，とメルロー＝ポンテイふうに言い換えても，事柄は同じである。この対化の着眼が「＜外的に＞知覚しうる出来事が『出来事の全部 der ganze Vorgang』ではない」というヴェーバーの見解を生みだす[1)]。ここで「出来事の全部」とは「行動 Verhalten」から識別される「行為 Handeln」に他ならない。

ヴェーバーにおける「経済」と「宗教」の定義も以上の点を考えに入れないと，解りづらいのではないか。

ある行為が「経済に方向づけられる（傍点は原文ではゲシュペルト部分）」というのは，その行為がその思われた意味にしたがって，有用であるものの欲求を満たすことに方向づけられる限りでの行為をいうべきである。（*Max Weber, W.u.G.*,S.31）。

宗教とはなんであるかという定義は最初に与えことはできない，むしろそのような定義は結局以下のような詳説の最後に与えうるものである。しかしわれわれは宗教の「本質」を問題に

するのではなく，一定種類の社会的行為の諸条件や諸結果を問題にするのである。その社会的行為の理解はここでもまたもっぱらその個人の主観的な諸体験，諸観念，諸目的から ── ＜意味＞から ── 得られるのである。その外的経過は実に多様であるから。（Max Weber, *W.u.G.*,4.Aufl., S.245）

「考えて」から行動するにせよ，行動してから「考える」にせよ，行動しながら「考える」にせよ，── さらには「考え」ないで行動するにせよ（たとえば「慣れ」によるくり返しの作業。この「考えない」行動にはそれ以前に「考える」学習経験という隠れた「意味」の沈殿層がある ── 人間の行動はつねに人間の「考え」と切っても切れない関係にある。

「有用であるもの」にたいする欲望を充足しようと「考えて」行動を「方向づける」場合，その行動は「経済」的な行為となる。「着ること」「食うこと」「住むこと」のために「働く」行動は，定義上，経済に「方向づけられた」行為である。なぜなら衣，食，住は人間にとって「有用なもの」であり，「働く」ことはこの「有用なもの」にたいする欲望充足に方向づけられる行為であるから。

以上のことをもっと丁寧に言い換えれば，着ることを「考えて」，食べることを「考えて」，住むことを「考えて」，「働く」（行動する）ということである。「働く」という行動を方向づける「考える」という「意味付与」の方向づけ（Orientierung）が，先ほどは「着るために働く」「食うために働く」「住むために働く」と目的論的に表現されたのである。けれども「働く」ことがルーチン化し日常化すると，この「ために」という目的論的な表象さえも漠然とし曖昧となり，極端なケースでは「出来事の全部」がもっぱら「着る・食う・住む」そして「働く」という「観察可能な」行動のシークエンスのみに切りつめられることになる。「考える」という行為者の「意味付与の世界」が「出来事の全部」からフェード・アウトするのである。行動と行為の違いは従って漸次的推移のうちにあり，質の差にあるのではない[2)]。

「宗教」の定義についても同じことがいえる。宗教といわれる外的経過は「実にさまざま」であり，その行動が「宗教」に「方向づられ」ているかどうかは，「もっぱらその個人の主観的な諸体験，諸観念，諸目的から－＜意味＞から－得られる」のだから。

**注**

1）「有意味的sinnvollであること ── ＜こと＞Vorgangや＜もの＞Objektに付与され，＜そのなかに見出され＞うる＜意味＞，一つの宗教的教義における世界全体の形而上学的＜意味＞から，ロビンソンの犬が狼の接近で吠えることの＜もつ＞意味まで ── に対比されるのは，没意味的sinnlosであること，もっと正確にはその＜意味を問わない＞こと，即ち＜自然＞である。」（Weber,1904, *G.A.z.WL.*, S.333）

＜意味のあるsinnvollこと＞と対置されるのは，＜意味のないsinnlosこと＞としての「自然」であるという考え方は，ヴェーバーの方法の基軸（「理解」と「説明」）をなす重要な考え方である。「出来事」における＜可視的観察的次元＞の「説明」と＜不可視的観念的次元＞の「理解」，この２つの＜こと＞をはっきりと差異化しながら，同時にこれを「出来事の全部」として一括把握するヴェーバーの慧眼は，刮目すべきものがある。

多分面従腹背のような行為（「出来事の全部」）は理解が難しい。面構えという観察可

能な＜表＞の行動の位相だけでは，「往々みえない」腹の＜裏＞世界（「考え」Meinenの世界）を見過ごしたり，見誤ったりするからである。面従腹背の行為（「出来事の全部」）は面と腹とが「一枚の紙の表と裏の関係」のように一体でありながら，面と腹とは，縫い針が突き刺されば指先に痛みが生ずる出来事とは異なり，１対１の因果関係には立たない。むしろ面と腹は意味し，意味される，象徴し象徴されるシンボリックな関係にある。この「出来事の全部」を理解するには，＜表＞を観察するとともに，＜腹＞，つまり「行為者によって思われている意味」の世界をつまびらかにすることが重要だということである。現前/付帯現前（Presentation/Appresentation）の対化関係」（フッサール），「見えるもの/見えないものの象徴的関係」（メルロー＝ポンティ），「シニフィー/シニフィアンの記号関係」（ソシュール）など，20世紀における人間科学の一連の根本発想が1910年代にヴェーバーの「理解社会学」という経験科学の土壌で確固として根付き，生かされているのだから，凄い。

2）「実際の行為は，多くの場合その思われた意味gemeinter Sinnをあいまいに半ば意識して，あるいは意識しないで経過する」（*W.u.G.*,S.10）とヴェーバーも述べている。大事なことは，この場合，半ば意識して，あるいは意識しないで経過する，実際の行為（「図柄（フィギュール）」）には，行為者の「思い」（即ち現下には意識されていないが，「学習」によって既に学習済みの習慣や記憶のうちに沈殿している「意味づけ」の潜在層を含めた「思い」）という「裏地（グラウンド）」がつねに「付帯され」ているということである。'meinen'に は「思惟するdenken」という主知的な側面だけでなく，意味に相当の幅がある。「意欲する」，「思いをよせる」，「意図する」，「言う」，「指す」といった主意的側面も含まれる。観察可能な具体的行動の経過や諸帰結の多様性は，その「裏地」をなす行為者の「思う」という行為者の意味」 ── 「半意識」や「無意識」の理念型的構成を含めて ── の解明によってはじめて「ああそうか」ということになる。行動の「観察」は，行為の「意味理解」と対関係をなし，しかも単に観察の「表地」が判然としない「判じ絵」であるばかりでなく，同様に「裏地」の「思われた意味」のほうも，一層判然としない場合もあるのだから，二重の意味で社会学者は，対象の解明には注意深くあらねばならない。「社会学によって構成される諸概念は，外的な意味でも理念型であるばかりでなく，内的な意味でも理念型である」とは，この意味であろう。かくしてヴェーバーがロビンソン・クルーソーについて言及する場合も「理念型」ロビンソン・クルーソーであることになる。

ロビンソン・クルーソーは，ヴェーバーにおいては「理念型」としての「同時に伝道もする孤立した経済人」である。「理解社会学」的に問われるのは，ロビンソンにおける宗教に「方向づけられる」行動と経済に「方向づけられる」行動との有意味的な「関連」，経済と宗教の行為連関である。

ヴェーバーの記述を引用しよう。

> 私［ジョン・ウエズレイ］の心配は，富がまし加われば増し加わるほど，宗教の内実が同じ程度で減じてしまうことである。であるから，事柄の性質上，純粋な宗教的態度のある種の再覚醒の状態がどうやって長く持続しうるものなのか，私はわからない。けだし，宗教的態度は必然的に労働意欲（勤勉）ならびに節約（質素）のもととならねばならず，またこれはほかならぬ富を産出することになる。けれども富が増し加われば，うぬぼれ，煩悩，この世の愛があらゆる形で増し加わってくるものだ。従ってメソデズムは，即ち「心の宗教」は，今日たとえ１本の緑なす樹木のように花をつけていようとも，どうやってこの状態を保ち続けることができるであろ

うか。」（aus:　Max Weber, 1920, *G.A.z.RS.* Ⅰ., S.196-19677 ）

この有名なウエズレイの一文の引用のあとで，ヴェーバーはロビンソン・クルーソーの行動を宗教優先の行為の「方向づけ」と経済優先の行為の「方向づけ」のちょうど＜中間＞に位置に査定する。即ち，１方の極端には「純粋な宗教的熱狂のアクメ」の状態，「虚栄の歳市をとおって天国へ急ぐバニヤンの＜巡礼＞の内面的に孤独な奮闘」があり，もう１方の極端には「良心が，いわば『柔らかい枕』として，居心地のいいブルジョア的生活の一連の手段のなかに組み入れられる状態」，「宗教の根っこが緩慢に死に絶え，功利主義的な此岸性が支配する状態」がある，その中間である注。

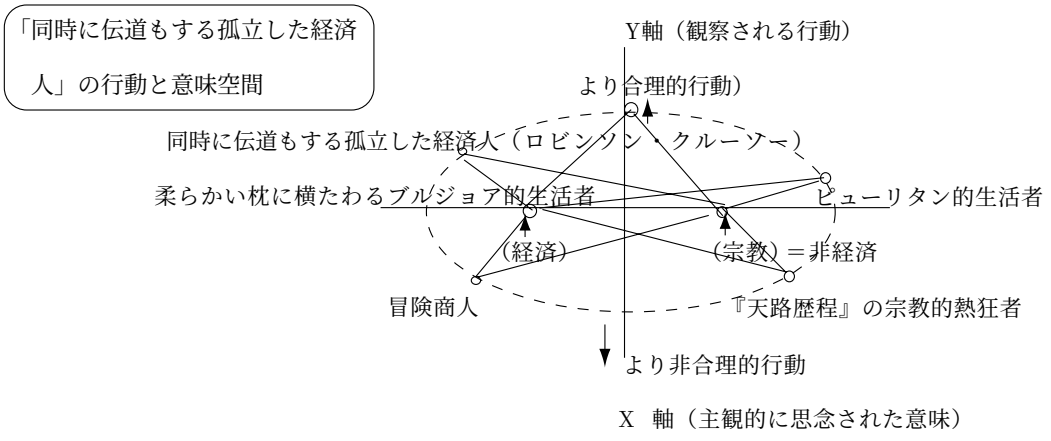
**注**　ヴェーバーの作業仮説を図式ふうに言い表せば，「経済」的利害と「非経済」的救済理念（宗教）はそれぞれロビンソン的人間類型における行動の独自の推進諸力であり，一方を他方に還元しつくすことはできない。いわゆる「同時に伝道もする孤立した経済人」としてのロビンソン・クルーソーは，下図のような楕円形軌道の一点に緊縛される。ロビンソンの個別具体的な行動の揺れは，いわばこの推進諸力を２つ焦点とする「力の合力」として「楕円軌道上の各点」に査定されるであろう。何れの点に実際の行動が位置するかは，ロビンソンの行動の「具体的個別的状況布置」を参酌しなければならない。

## Ⅲ　小括と展望

### １．小括

マルクスとヴェーバーの『ロビンソン・クルーソー』の読み方をとおして社会科学における「ロビンソン・クルーソー」問題の内実を瞥見した。「ややつむじ曲がり」的にロビンソン・クルーソーを読む（大塚久雄）という表現は，マルクスとヴェーバーの読み方をたどってみて「なるほどなあ」と得心がいく。それぞれの認識関心や問題関心の違いを越えて「ロビンソン・クルーソー」を社会科学的に読むという読み方の「方法論」が見えてくる。

第１に，孤島というユートピア的「自然状態」が，『資本』論においては「自由な労働」カテゴリー析出の実験場として，またヴェーバーにおいては「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」の意味上の適合的関連を調べる実験場として用いられている。近代市民社会の基礎単位としての「私的個人」の成立，「自由な労働」



の発祥の現場として「孤島に生きるロビンソン・クルーソー」が脚光を浴びるのである。

第２に，これは社会科学のもう１つの読み方の特徴とも関連する。ロビンソン・クルーソーの『冒険と生涯』のうち孤島生活「以前」の「冒険」生活の部分を読まない（捨象する）という，読み方における顕著な片寄りである。この捨象ないし片寄りという作業は，社会科学の思考実験，「その他の条件が等しければ」ceteris paribusを行う上で不可欠である。大塚久雄の表現，ロビンソン・クルーソーを「ややつむじ曲がり的に読む」は，社会科学的な読み方としては当然なのである。「自由な労働」の経済学的「範疇Kategorie」の析出も「同時に伝道もする孤立した経済人」の「理念型idealer Typus」構成も，この「捨象」（マルクス）もしくは「片寄り」（ヴェーバー）によってはじめて可能になるからである。

ロビンソン・クルーソー物語は，かくしてマルクス「労働価値」学説の「価値」概念の範例を準備させ，ヴェーバー「理解社会学」の「意味」学説の要諦ともなった[注]。おもうに，「社会関係」のネットワークが極端に切りつめられた孤島でのロビンソン・クルーソーの生活は，社会科学者が人間の「合理的行動」を査定する際に不可欠となる「その他の条件が等しければ」の条件設定（思考実験）── 自然科学の「実験」にも等しい ── のために格好の材料を提供したのである。しかし，ここに社会科学的「読解」の特質と限界がある，といわねばならない。

**注** 理解社会学の「意味」学説の根本問題は，「いかにして『行為者によって主観的に思われた意味』に関する科学は可能であるか」にある。ヴェーバーの回答は，＜行為＞の「理念型」Idealer Typusもしくは「類型」Typus構成によって可能であるというものである。ロビンソン・クルーソー，「同時に伝道もする孤立した経済人」も，このような「理念型」の一例である。ここでヴェーバーの「理念型」論に特徴的な概念構成の「階梯的秩序」について一言すべきであろう。即ち，理解社会学の＜固有の対象＞としての「行為者によって主観的に思われた『意味』の世界」は，すでに「意味」の構成主体としての＜行為者＞が前提（「一般定立General-thesis」）されており，この行為者によって「主観的に思われた『意味』」の世界が構成される。「理念型」概念は，いわば行為者によって構成された＜第１階梯＞の意味の秩序をさらに科学者が「概念的に加工した」＜第２階梯＞の「意味」の秩序である。日常の世界が「すでに構成ずみの意味」の構成態Aufbauであり，「理念型」的概念構成はその２次的，派生的構成態である，という主張は1930年代にアルフレッド・シュッツ（『社会的世界の意味構成』1932）によって主張された。今日の社会学における「構築主義」の理論的先駆をなすといえる。社会科学におけるロビンソン・クルーソーの読み方は，ダニエル・デフォーの第１階梯の「意味」構成的世界を「ややつむじ曲がり的に」概念加工した「第２階梯」の意味的世界であるといっても誤りではなかろう。

## ２．展望

もう一つの読み方が可能である。ダニエル・デフォーにおける『ロビンソン・クルーソー』を＜構成＞主義的konstitutivに「読む」という読み方である。デフォーは，独特の方法論によって「ロビンソン・クルーソーの意味世界」を構築する。著者のデフォー，主人公の「ロビンソン・クルーソー」それに読者という三者が，いわば１つの定点に重なりあって立つような「語り方」，従って「読み方」の創出である。

結論を先に示せば，それは１つに，デフォー

における「１人称単数＜わたくし＞の語りの形式の採用」であり，２つに，＜日記＞スタイルによる叙述形式の採用である。この「方法論」が，ロビンソン・クルーソーと著者デフォーとの距離を縮じめ，さらには「読者」との距離をも縮める『ロビンソン・クルーソー』の「物語」世界の構築を可能にするように思える。

## ２-１．一人称単数＜わたくし＞の視点

第１の点。１人称単数＜わたくし＞による「語り」の形式は，『ロビンソン・クルーソー』物語の特筆に値する特徴の１つである。生い立ち，家出，冒険，海賊船との出会い，ブラジルの農園経営，遭難，離島での生活，日記，回心，祈りと労働などなど，すべてこれらの出来事は他のだれでもない，この＜わたくし＞の出来事として語られる。＜わたくし＞の生い立ちであり，＜わたくし＞の家出であり，＜わたくし＞の冒険であり，＜わたくし＞の海賊船との出会いであり，＜わたくし＞の農園経営であり，＜わたくし＞の遭難であり，＜わたくし＞の離島での生活であり，＜わたくし＞の日記であり，＜わたくし＞の回心であり，＜わたくし＞の祈りと労働である。一人称単数＜わたくし＞の特権的行使において物語『ロビンソン・クルーソー』は終始一貫する。

デフォーによる＜わたくし＞の語りの１つの例を最初にあげ，次いでこの＜わたしくし＞の語りの特徴に関する研究例を示そう。「怒り狂った大波が，山のようにボートの背後からおおいかぶさってき」て，ボートが転覆し，海のなかにのみこまれてしまったときの「思いの混乱」を綴っている文章の一部である。

> The wave that came upon *me* again, buried *me* at once 20 or 30 foot deep in its own body; *and I* could feel *my* self carried with a mighty force and swiftness towards the shore a very great way; *but I* held *my* breath, *and* assisted *my* self to swim still forward with all *my* might. *I* was ready to burst with holding *my* breath, when, as *I* felt *my* self rising up, so to *my* immediate relief, *I* found *my* head and hands shoot out above the surface of the water ; *and* tho' it was not two seconds of time that *I* could keep *my* self so, yet relieved *me* greatly, gave *me* breath and new courage. *I* was covered again with water a good while, *but* not so long but *I* held it out; *and* finding the water had quite spent it self, *and* begun to return, *I* strook forward against the return of the waves, *and* felt ground with *my* feet. *I* stood still a few moments to recover breath, *and* till the water went from *me*, *and* then took to *my* heels, *and* run with what strength *I* had farther towards the shore. *But* neither would this deliver *me* from the fury of the sea, which came pouring in after *me* again, *and* twice more *I* was lifted up by the waves and carried forwards as before, the shore being very flat.（Defoe, 64-65 イタリックは筆者）

「水のなかに沈んだときに私が感じた，あの混乱した思いはいまでも言葉では言い表せない」（Defoe, ebd.,p.64）。その「言葉では言い表せない」「思考の混乱」（「主観的に思われた意味」が言説化できない）した状態での＜わたくし＞の語りの問題である。これをジョン・リチャッティ John J Richertti という最近のデフォー研究家が次のように解説している。

> 「ロビンソン・クルーソーは，その瞬間に感じた恐怖を思い起こすだけであるが，それを出来事の正確な順序を追う目で，自分が本能的に行ったことを記録するという仕方で言い表す」。

「大波の表面から20ないし30フィートも水中深く引き込まれた」と見積もりし，「自分の頭と両手が水面の上に浮かんでいたのは，２秒もたつかたたないぐらいの間であった」と語る。「ばらばらの，ルースな一つながりの長い文章は，水や波の荒れ狂ういろいろな動きを正確にチャートしながら，１つの紛糾した場面を喚起させる。」「<and>や<but>といった等位接続詞によって支えられるだけであるが，文章には同時に限定，区別，さらには直喩が渦巻いている。」「デフォーによる『ロビンソン・クルーソー』の散文体は，諸事実とこれらの事実の印象との双方を正確に扱っている。体験の諸対象との一貫した指示関係を示し，また構文法上の散列文や反復文によって体験の主観的諸影響をも示して。」（Richetti，p.57）。

一人称単数＜わたくし＞の視座の大きな特徴は，「方法論上のエゴセントリズム」にあり，目前に広がる「知覚の外部地平」への展望可能性（水や波の動きなどの出来事の記録）と，「主観的意味」，思考し，悩み，ためらい，絶望し，祈るなどの「こころ（精神）の内部地平」への展望可能性（この場合は「恐怖心」）とが同時に切り開かれる点にある。恐怖心によって方向づけられる「精神の内部地平」（「主観的に思われた意味」）が極度に制限される場合でも，＜わたくし＞の＜まなざし＞は目前の「知覚世界」を精確につかみ取ることによってバランスされる。これは「精神の内部地平」と「知覚の外部地平」とが＜わたくし＞という同一の「意識の流れ」（ベルクソン）に内在しているからこそ可能なのである注。

**注**　A.シュッツもいう。「わたくしの体験を満たしている豊かな持続経過の連続は，原則としてわたくしの自己解釈につねに開かれている」（シュッツ　訳書145頁）。＜わたくし＞は，そのつもりになれば，＜わたくし＞の体験をいつでも再生において目の前に＜現前化＞できるし，すでに構成された意味連関からこの意味連関を構成した体験へ目を転ずることもできる。これは自己体験の自己理解に固有の構造である。このような特徴が＜わたくしの＞視座に備わるわけは，解釈される体験が「内在的に方向づけられる志向体験」であって，「志向的諸対象（ノエマ）が志向作用（ノエシス）そのものと同一の体験流に属している」（シュッツ訳書138頁）からである。しかし，このことは＜わたくし＞の解釈にゆだねられている＜他我＞（あなたのエゴ，彼や彼女のエゴ・・・）の体験流のばあいには，一切妥当しない。他者体験の解釈（理解）に固有の構造は，「超越的に方向づけられる志向体験」にある。解釈される志向対象が＜わたくし＞に内在せず，＜わたくし＞とは異なる他我の体験流に内在するために，志向作用とその志向対象とが同一の体験流に属し得ない点に，その特徴がある。

マックス・ヴェーバーの理解社会学の「意味」学説（「方法論的個人主義」）とデフォーの＜わたくし＞の語りという方法論的エゴセントリズムとを対比した場合，デフォーの試みの特徴がいっそう鮮明になる。すでに記したように，ヴェーバーの「意味」学説は，第２階梯の「意味」の次元（「理念型」の構成）から「日常の世界」を照射する新カント学派の認識論に基礎をおいている（Ⅲ－１の注を参照）。デフォーの＜わたくし＞の語りは，はじめから「当たり前のこと」として「日常の世界」そのものの＜第１階梯＞の「意味」構築の糸を紡ぐ。

デフォーがロビンソンに「身を寄せる」，そのうえに「読者」もまたロビンソンに「身を寄せる」。「書かれた作品」を間に挟んで「書き手」と「読み手」とが「共同の意味構築」に参加することは，理論的にはともかく，『物語』を

「読む」という「日常の実践の世界」では「自然のこと」である。

デフォーの『ロビンソン・クルーソー』における「一人称単数＜わたくし＞」の語りは，＜わたくし＞が「体験した」あらゆる種類の出来事を「語る」にすぎないといってしまえば，それまでのことである。しかしそれは「コロンブスの卵」というものである。「＜わたくし＞を語ること」と「『＜わたくし＞を語る』とは，どのようなことか」と問うことは区別した方がよい。「庭先の一本の花の咲いた木」の存在と「『庭先の一本の花の咲いた木』をわたしは眺める」という２つの事柄は本質的に異なるのではないか。前者は存在の判断の問題であり，後者は事柄へ接近する「方法」の問題である。「わたくしが語ること」と「『＜わたくし＞が語ること』の方法」とは，くどいようだが根本的に異なるものではないか。「＜わたくし＞が語るということは，＜個＞としての＜わたくし＞の存立への準拠を前提する以上，それだけですでに「話し手は」は「新しい」「モダン」な精神への転換と移行を示している。「＜わたくし＞が語る」ことへのこだわり（方法）は，つねにすでに「彼ら」が語ること，「われわれ」が語ること，「きみが語ること」との差異と同等の問題にも直面せざるをえない。＜わたくし＞という視点の「特権的地位」が鮮明にならない限り，「現代のアイデンティティ探し」の問題や「自分史」研究は依然「藪の中」ということにもなる[注]。

**注**　リクール（Paul Ricoeur）の著作 *Oneself as Another*や*Time and Narrative*（久米博訳『時間と物語』１,２,３）は，ここでは参照できなかったが，「アイデンティティの問題」をはじめ「物語と歴史」に関する興味深い係争点を洗い出している。

## 2-2．日記スタイルの文体の問題

デフォーには「日記のスタイル」への着眼がある。この認識は先ず『ロビンソン・クルーソー』の「日記」から得られるが，この日記からだけではない。物語の進行がすべて「過去時制」の文体で統一されていることである。物語は「私は1637年，ヨーク市に生まれた*I was born* in the year 1632, in the city of York」からはじまり，長い孤島での生活からイギリスへもどり，「ヨブの終わりは始めよりもよかったとあるが，なるほどそのとおりだと，私は申してよかった *I might well say,* now indeed, that the latter end of Job was better than the beginning.」（279）と遍歴の生活の全体を回顧する際にも，すべての文章が「過去時制」で書かれている。この「過去時制」へのデフォーのこだわりはなにか。

デフォーは『ロビンソン・クルーソー』の序のなかで「編者はこの話が事実の正しい歴史であると信じている」と記している。同じく「もしだれか私人private manのこの世における冒険の物語が出版するに値し，また出版されれば，受け入れられるであろうとするなら，編者はこの物語こそそのようなものであると考える」（p.25 ）と。

「日記」，「過去時制」そして「歴史」。「過去時制」として「歴史化された」＜わたくし＞の「実際の体験談」（=「日記」）。

「日記」を書くという行為は，「忘れないように」，あるいは反対に「忘れようとして」その日の＜わたくし＞の身辺におこった出来事へと立ち返る行為である。ロビンソンは，「自分のおかれている境遇，落ち込んでいる苦境」から脱却したいがために，日記を書いている。

「日記」はそれ故＜わたくし＞の体験の＜いま＞の世界を，過去へと「時間化」すること，＜過ぎ去った事実＞としてつむぎ出すこと，＜歴史化する＞ことである。体験に「生きる」現在を「体験の体験」として意味加工すること，「歴史」を構築することであるといってよい。

『ロビンソン・クルーソー』物語は「歴史」だ，とデフォーがいうのは，このような意味においてであろう。この歴史は社会の「大きな」歴史を意味しない。社会の大きな歴史からみれば，この「歴史」は些末で取るに足らない「歴史」であるかも知れない。しかしどんなに「小さい歴史」でも，歴史は歴史である。

歴史としての『ロビンソン・クルーソー』物語は生粋の「私人」の「冒険」話である。教会や国家といった公権力の庇護のもとに行なわれる「公的な事業」の物語（コロンブスの冒険）ではない。私人が「固有の社会的カテゴリー」として存立しうる社会の到来。この社会の構造転換の歴史と共に「私人」の「小さな歴史」も始まる。

17世紀イギリス社会の構造転換については既に述べた。新しい「社会的カテゴリー」が新興の産業的「中産者層」とよばれる「商工業者たち」であることも指摘した[注)]。

『ロビンソン・クルーソー』を読むということはデフォーの「いま・ここ・わたくし」の時間の時間化，歴史化の「所産」を，あべこべに「いま・ここ・わたくし」へと現在化し，時間化する「行為」に他ならない。＜わたくし＞の「歴史」を再び「生きる」ことである。

デフォーの時代には「生活史」とか「自分史」などと今日社会学者がよぶ，１）伝記体の形式，２）＜わたくし＞による一人称単数のひとり語りの形式，３）日記体の形式，４）私人のカテゴリーの形式を満足するような「研究のジャンル」は存在しなかった。「小さな歴史」を書く，自分史を書く。デフォーが『ロビンソン・クルーソー』の中で「歴史」にこだわったのはこのことである。歴史一般，あるいは大きな社会の歴史にこだわったのではない。「小さな歴史」を描くなかに「大きな社会の歴史」の襞をみようと志したのだろう。

注　若干補足しておきたい。『ロビンソン・クルーソー』の社会的「共鳴盤」の問題。17世紀イギリス社会における新興の産業的「中産者層」とよばれる「商工業者たち」の存在。周知のとおり，彼らこそ，ロビンソン・クルーソーの「信念」や「行動」の「準拠枠（フレーム・オブ・レファレンス）」に共鳴し，これを支持した人々であった。平易な言葉で綴られたロビンソン・クルーソーの「物語」を愛好する読者大衆の存在－これは１個の重要な「社会学的」事実である－が，デフォーの「物語ではなく歴史だ」という発言を後押ししていることは否めない。『ロビンソン・クルーソー』を読むということは，それ故に「いま・ここ・わたくし」の現場から描出されるロビンソン・クルーソーの「生きられる歴史」を介して，その社会的「共鳴盤」であるこれらの新興市民層の「歴史」を現在化する試みでもある。「君が撮った写真がよくないとしたら，それは被写体に十分接近していないからだ」。これは雑誌『ライフ』の写真家ロバート・キャパの言葉であるが，『ロビンソン・クルーソー』は「物語ではなく歴史だ」というデフォーの信条に通じるものがある。

2001・６・３

## 参考文献


Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*,（Pengin Classic, 1982）平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー』上・下（岩波文庫 1967）

Daniel Defoe, *The Farther Adventures of Robinson Crusoe*（Basil Blackwell Oxford 1974）

Daniel Defoe, *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe ,with his Vision of the Angelic World*（AMS Press New York 1974）

Harold Bloom（ed.）, *Daniel Defoe*（Chelsea House Publishers New York 1987）

John J. Richetti, *Daniel Defoe* ,（G.K.Hall, Boston 1987）

大塚久雄『社会科学における人間の問題』（岩波新書 1978）

C.B.Macpherson, *The Political Theory of Possessive Individualism, Hobes to Locke*（Oxford University Press, 1962）藤野渉他訳『所有的個人主義の政治理論』（合同出版社 1980）

Karl Marx, *Das Kapital ; Kritik der politischen Ökonomie* Erster Band（Dietz Verl. Berlin（1969）長谷部文雄訳『資本論　経済学批判』第１部上冊 青木書店1973）

Talcott Parsons, *The Structure of Socal Action*（The Free Press New York 1937）稲上　毅他訳『社会的行為の構造』1-5木鐸社1982）

Paul Ricoeur, *Oneself As Another*,（ tr. by Katheleen Blamey, University of Chicago Press 1991）

Paul Ricoeur,*Temps et Récit* Ⅰ, Seuil Paris 1983）久米博訳『時間と物語』（新曜社1987）

David Riesmann,*The Lonely Crowd; A Study of the Changing American character*（Yale University Press New Haven & London 1961）加藤秀俊訳『孤独なる群衆』（みすず書房 1964）

Alfred Schutz, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*（Springer Wien 1932）佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社1982）

R.H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism*,（Harcourt Brace and Co., 1926）出口勇蔵訳『宗教と資本主義の興隆』上・下巻　岩波文庫）

Max Weber, Der protestantische Ethik und der Geist des Kapitalisus, in :*Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie* 1（J.C.B.Mohr Tübingen 1920）

Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft ; Grundriss der Verstehenden Soziologie*（J.C.B. Mohr Tubingen 1976）

Max Weber, R.Stammlers “Überwindung ”der materialistischen Geschichtauffassung. in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*（J.C.B.Mohr Tübingen 1922）

# ‘*Robinson Crusoe*’ as a Social Science Issue
## ── The Robinsonian-type of Man ──

Yoshikazu SATO＊

**Summary**: In this paper, which examines Daniel Defoe's novel, *The Life and Strange Suprising Adventures of Robinson Crusoe*, the author would like to clarify the concepts ‘individual’ and ‘society’ in their earliest stages of civil society, while analyzing the interrelationship between author, story and time period, and focusing on the way ‘Robinson Crusoe’ was treated by such social scientists as Karl Marx and Max Weber. Paying particular attention to Defoe's narrative, which was written in the ‘first person singular’, the author would like to emphasize the historical and social significance of this novel, from which both social scientific category of ‘private person’ and the logic of ‘I’ (egology),that is, a key concept of the natural attitude of phenomenology came out, and would like to show how the meaning world of social scientific thinking should be related to the meaning world of ‘egological’ thinking.

**key words**: a problem of Robinson Crusoe, Daniel Defoe, Karl Karx, Max Weber, personification of the economic categories, ideal types, meaning, private man, experimental field of ‘isolated island’, narrative of a biographic style, a form of the first person singular

＊Professor of the Faculty of the Social Sciences, Ritsumeikan University